

病害虫防除技術情報 第1号

富山県農林水産総合技術センター所長

大豆紫斑病の発生動向と対策

前年の発生量が多く、7月下旬～8月上旬の降水量が多かったことなどから、紫斑病の多発生が懸念される。このため、ほ場の排水と防除対策の徹底が必要である。

1 発生地域: 県下全域

2 発生程度: 多い

3 根拠

(1) 前年の紫斑粒の発生量が多く、伝染源量は多いと推定される。

(2) 7月21日～8月15日にかけて降雨日が多く、降水量は平年比336%とかなり多かった。

(3) 向こう1か月の降水量は並か多いと予想されており、本病菌の発生に好適な条件になると推測される。

4 防除対策

(1) 多湿ほ場で発生が多いので、排水対策を徹底し、降雨後は速やかに排水する。

(2) 2回の基本防除(8月2～3半旬頃と4～5半旬頃)を徹底する。また、散布の際は同一系統の薬剤の連用を避け、莢や茎葉に薬剤が十分付着するようにする(カメムシ類との同時防除を行う)。

(3) 刈遅れは発病を助長するので、適期収穫し、収穫後はすみやかに乾燥する。

表1 大豆防除体系(例)

回数	時期	粉剤体系	液剤体系	
1回目 (参考)	8月2～3半旬	スミチオンベルコート粉剤 DL	ベルコートフロアブル または サンリット水和剤 または Zボルドー + スミチオン乳剤	
2回目	8月4～5半旬	Zボルトートレボン粉剤 DL	注1) アミスタートレボン SE	注2) マネージ DF または ベルコートフロアブル または サンリット水和剤 + トレボン乳剤

注1) QoI 剤は1作期1回までの使用とする。

注2) 1回目と別の剤を選択

※農薬散布にあたっては、周辺作物や住宅地等への飛散防止に努めるとともに、農薬の使用回数、使用時期等の基準を遵守する。

【参考資料】

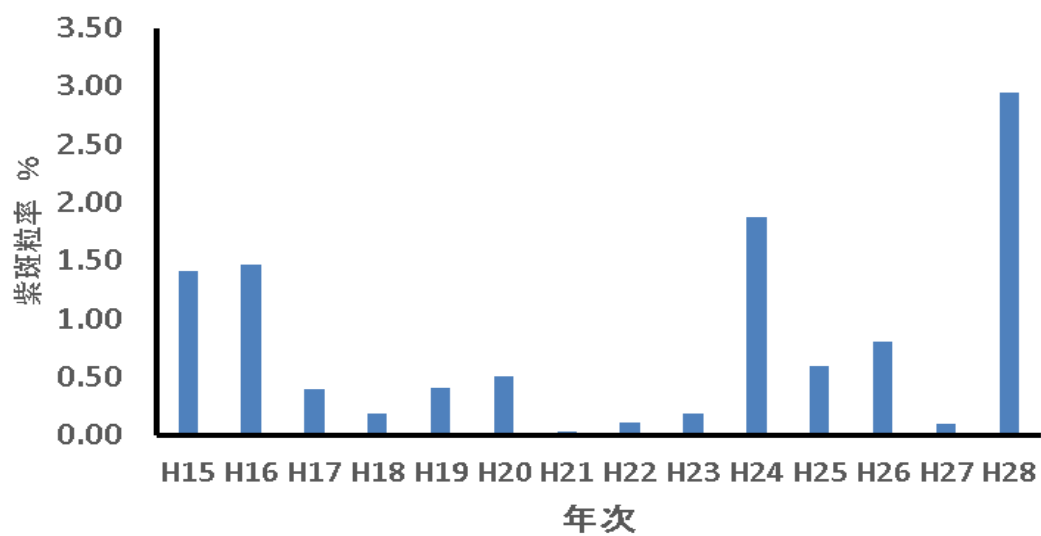


図1 紫斑病の発生推移（子実被害）



写真：大豆の紫斑粒

問合せ先 農業研究所 病理昆虫課
TEL076-429-5249 FAX076-429-2701